

日本の“家”



《ひだまり》的每一期，都将通过图片和文章来介绍日本年轻人的生活以及当今日本文化为中心题材的《今日日本》，并介绍以《今日日本》为题材的教学设计，既可供教师教学时作参考，还可将《今日日本》贴在教室里，为学生了解日本提供帮助。

今日の日本の住宅事情

日本の総住宅数は5025万戸、総世帯数は4436万世帯です。5025万戸のうち、約58%が一戸建てで、約38%が集合住宅です。また、構造を見ると、約64%が木造で、約33%が鉄骨・鉄筋コンクリート造です。

住宅一戸あたりの広さと居住室数は、それぞれ全国平均で、約88平方メートル、4.7部屋です。また、持ち家率は、約60%です。しかし、建て方や広さ、持ち家率は都心部と地方とで大きな差があります。例えば、東京では、集合住宅のほうが一戸建てより多く、全体の約67%を占めています。住宅の広さを見ると、東京都の約59平方メートル、大阪府の約67平方メートルに比べて、富山県では約151平方メートル、秋田県では約135平方メートルと大きな開きがあります。また、持ち家率も、東京都が最も低く約41%、次に低いのは大阪府の約49%です。もっとも持ち家率が高いのは富山県の80%、次に秋田県の77%で、こちらも大きな開きがあります。つまり、東京などの都心部では、土地代が高く、人口が密集しているため、賃貸の狭い集合住宅に住む人が多いといえるでしょう。ちなみに、集合住宅は高層化が進んでいて、日本で一番高い集合住宅は、現在大阪に建設している高さ200メートルの54階建てです。(戸数、構造、広さなどは1988年現在)

住宅に見られる工夫

住宅は、従来、その土地の風土や気候、文化などに影響を受けてきました。例えば、高温多湿な梅雨のある日本では、少しでも快適に過ごせるように、木材や紙などの自然素材が多用され、風がよく通るように襖や障子を開けて使うような知恵が見られましたが、最近では、エアコンの普及によって、密閉度の高い建材や構造が増えてきました。もちろん、雪の多い地域では、屋根を急勾配にしたり、台風の多い沖縄などでは、屋根を低くし瓦をしっくい固めたりするなどの工夫は今でも見られます。

また、地震の多い日本では、1981年に建築基準法が定められ、それ以降の建築物には耐震構造がとられるようになってきました。耐震構造というのは、地震や強風などの力で建物が揺れても耐えられるように設計された構造のことです。さらに最近、注目を集めているのは免震構造の建物です。これは、建物の基礎部分や地面と建物との間にクッションのような部分をつくり、それにより地震のエネルギーを吸収し、激しい揺れを緩やかな揺れに変換するというものです。20階建以上の集合住宅には免震構造が必ず採用されています。

大きく変わった住宅事情

近年、日本の住宅事情は大きく変わりました。特に、1950年代から始まっ



神奈川県横浜市内の住宅街

部屋の大きさは一般的に「～畳」で表します。これは、畳何枚分に相当するかを表しています。畳の部屋(和室)はもちろん、フローリングなど畳のない洋室でも、「～畳」で広さを表します。1畳の広さは地域によって異なりますが、大体約182cm×91cmです。また、最近の集合住宅の1畳は約174×86cmで、従来のものよりもかなり小さいようです。住宅の広さにもよりますが、一部の広さは4.5～6畳が多いようです。ただし、リビングルームは家族みんなが集まる場所なので、ほかの部屋よりも広くするのが一般的です。

また、床面積や敷地面積は、平方メートルと併用して「～坪」がよく使われます。1坪は2畳分の広さで、約3.3平方メートルです。



兵庫県姫路市内の住宅



東京都内の集合住宅



沖縄県伊是名島の住宅

た高度経済成長期には、人口が都市部に集中したために住宅難となりました。そして、住宅を大量に供給するために、1955年に日本住宅公団が設立され、大型の集合住宅が都市部を中心に日本のあちこちに建設されるようになったのです。その後、1960年代に入ると、民間企業も集合住宅を建設するようになり、賃貸だけでなく分譲の集合住宅も登場してきました。

同時に、高度経済成長期以降、核家族化が一気に加速しました。多くの若者が親元を離れ、都市部に移動したことがその背景にあると考えられます。1955年、核家族の割合は三世帯世帯と同程度の45%でしたが、1980年には、核家族の割合は60%に増え、三世帯世帯は16%にまで急減しました。その後、核家族は60%前後で推移していますが、三世帯世帯は減り続け、2002年現在わずか10%となり、一方単身世帯が増加し、23%にも達しています。都心部では、単身者を対象にした、18～22平方メートルの広さのワンルームマンションが増えています。

部屋の機能と間取り

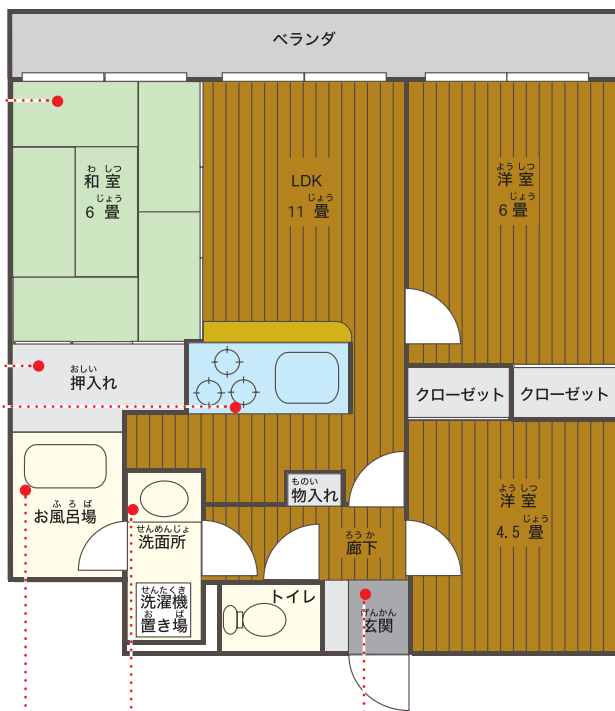
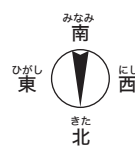
集合住宅の登場は間取りの考え方を変えました。1950年代に日本住宅公団が建てた住宅の一般的な間取りは、ダイニングキッチンと2部屋のあ

る2DKでした。この時、キッチンとダイニングを同じ空間に配置するダイニングキッチン(DK)というコンセプトが導入され、これが一般的なものになっていきました。このDKは、食事やくつろぎの空間と寝る空間を分離し、また親子や夫婦のプライベートな空間を分離するという間取りでした。DKをさらに広くリビング機能も持たせた空間は、LDKと呼ばれるようになりました。子ども部屋が多くの家庭に作られるようになったのもこのころのことです。ベネッセコーポレーションの調査によると、自分の部屋を持っている高校生は77.2%。兄弟姉妹と共有の部屋を持っている高校生と併せると、93%に上ります。

以前、日本の住宅では、壁ではなく襖や障子で部屋を区切っていました。広いスペースが必要なときには襖や障子を明け、小さい空間がいくつかほしいときには襖や障子を閉めて使っていたのです。また、一つの部屋がいろいろな機能をもっていました。例えば、日中は折りたたみのテーブルを出して食事をするダイニングとなり、夜はテーブルをしまつて、布団を敷くと寝室になりました。しかし、機能別に部屋が分けられるようになったことから、最近では、間取りが家族関係に大きく影響を与えるということが



3LDK



指摘されるようになっていきます。特に、子ども部屋やリビングルームの配置や役割について見直されています。子ども部屋が親子のコミュニケーションを阻んでいるという批判もある一方で、子ども部屋は子どもの自立心を養う場として必要だという認識も強くあります。そこで、子ども部屋を孤立させるのではなく、リビングルームを通して子ども部屋に行くような間取りが人気になっています。また、リビングルームを広くし、住宅の中心にすることで、家族全員が集う場所にするなど家族の絆を深める間取りが注目を集めています。



子ども部屋



子ども部屋：姉妹で共有



自分の部屋で趣味のマンガに没頭



自分の部屋で勉強に集中

家族とどう過ごす？

- ① 家族そろって夕食をとる。塾のある日はひとりで食べる。
- ② 祖母とテレビゲームで遊ぶ。
- ③ リビングルームで家族と話をする。
- ④ おやつを食べながら、父とひなたぼっこ。父は本を読んでいる。
- ⑤ 姉と楽しく話をする。姉は悩みをよく聞いてくれる。
- ⑥ 姉が髪をすいてくれている。姉の夢は美容師になることだ。
- ⑦ 母と夕食後の片付けをする。
- ⑧ 毎朝、学校に行く前に仏壇の母の遺影に手を合わせて、心の中で話しかける。



* 佛龕：供奉佛像以及先祖灵牌、遺影的櫥柜。一般还供奉有蜡烛、香、花、水果以及故人生前喜欢的东西。